

「新人」

京都大学公共政策大学院修士課程

千葉 修平

今回は、新聞記者時代の思い出の中で、院生の皆さんと同じ、24、25歳位だった入社2、3年目の駆け出し時代のお話を書かせていただきます。報道への就職を目指すされる方や、来年就職される皆さんへのエールになれば幸いです。

就職氷河期の真っ只中の1998年4月、私は某全国紙に入社しました。当時、薬害エイズ事件で行政の怠慢をいち早く暴いたこの新聞社に憧れたのです。配属先は京都支局。期待に胸を躍らせていた私を待っていたのは、超個性派で豪傑な先輩・上司でした。「死ぬ、ボケ、カス」を連発する先輩。毎晩、朝まで飲み歩いたあげく、会社に戻るや若手にソーマンを作らせるデスク……。正直、面くらいました（苦笑）。

全国紙は入社すると、5年〜8年間に、地方支局を2、3箇所まわされます。ここである種の選別が行われ、所属本社に上がる者（京都支局は大

阪本社）と、そのまま地方支局を転々とする

者に分かれます。京都支局は、2、3箇所目に来る中堅記者が多く、そういった記者にとっては本社に上がれるか否かの勝負の場であり、ピリピリした雰囲気がありました。一方で、当時は、新人をストレス解消も兼ねて、有無を言わずにしごく関西独特の伝統があったのです。私の入社前年には、新人が入社5ヶ月で退社していました。当時の支局長は「とにかく辞めないやつをくれ」と要望した結果、私にお鉢が回ってきたそうです（笑）。縁もゆかりもない関西の地で、現場を這いずり回り、毎日怒鳴られまくり、月3、4回の泊まり勤務では消防無線を盗聴しながら仮眠（もちろん火事や事故があれば出勤です）、たまの休日に遊ぶ友達もない日々は、確実に私の精神をタフにしてくれたと思います。その副産物として、当時は比較的、優しげなマ

スクだったと思うのですが、知り合いの警察官に「あんた、うちの捜査一課（殺人事件担当）のデカみたいやな」と言われるくらい、引き締まってきました。余談ですが、数年後、記者クラブにヤクザ崩れが怒鳴り込んできたことがあったのですが、私が代表で対応して帰って頂きました。「あんた、いい目をしてい」とほめられました（苦笑）。

こんな環境で迎えた入社2年目は、私の人生至上でもピークと言えるほど精神・肉体的にきついと同時に、手応えも感じた年でした。4月から京都府警本部のサブキャップを任せられ、当時流行っていた「モーニング娘。」のCDを流しながら、自家用車で夜討ち朝駆けの日々。もちろん日中も事件取材ですから、とにかく睡眠不足です。夏の甲子園取材では担当の智弁和歌山が勝ち進み、連日の猛暑に身を焦がしました。さすがに秋にはストレス性の内臓出血でダウンする始末でした。

一方で、少しずつ仕事に手応えを感じ始めた時期でした。11月には、「腎臓売れ」などの過酷な取立てで問題になった商工ローンの取材班に入れてもらいました。当時の社会部の先輩に助けて頂きながら、いわゆる調査報

道を行い、何本かのスクープをものに出来ました。結構、良い賞を受賞でき、本社で表彰もされました。この取材班も12月中旬に解散となり、「今年こそは実家に帰省できるぞ」と胸躍らせていた数日後、最悪の大事件が起きてしまいました。京都市山科区の小学校校庭で小学校2年生の男児が、無職の20代前半の男に刺殺されたのです。男は「てるくはのる」という暗号めいた紙（結局は特に意味はなかった）を残し、衣服を脱ぎながら逃走。事件解決は長引き、数カ月後に警察の任意同行から逃走してマンション屋上から飛び降りるといふ衝撃的な結末の事件でした。この時は、ある警察幹部の自宅を毎日訪れ、朝は6時から、夜は7時から午前3時まで、徹底的な夜打ち朝駆けをかけました。疲労と重圧で白昼夢のような感じでした。ハイヤーの運転手の「若いのにかわいそうに」との言葉に、「俺は可愛そうじゃない」と怒鳴ったこともありました。最後には幹部から「あんたには、負けたわ」とのドラマのようなセリフと共に、社会面トップを飾る特ダネを手にしました（今思えば、この日本の報道スタイルは、功罪が大きいと思います）。

一方で、3年目には今でも自分の教訓にな

っている大失敗もおかしました。この男児刺殺事件の1年後のことです。男児の命日に、両親が学校を訪れて冥福を祈ることになりました。ご両親から「取材はお断りしたい」との申し出がありましたので、私は上司と相談の上、取材を取りやめました。この事件では、メディアスクラム（過剰取材）が問題になり（9割はテレビが酷いのですが）、学校周辺の住民から苦情が出るなど、私自身、報道の姿勢に疑問を持っていたのです。私は正しい判断をしたのだと思っていました。

翌日の他紙を見て、愕然としました。各紙ともご両親がお参りしている写真を一面で掲載していたのです。いわゆる特オチですが、私の気持ちを落ち込ませたのは、そんなことではなく、その写真の光景でした。それは、ご両親が現場にたたずみ、2人で花を添えながら、一人息子の冥福を祈る光景でした。両親のやりようのない悲しみ、理不尽さ、そして、このような事件を二度と起こしてはならない、そんな思いが伝わってくる光景だったのです。そこには報道が伝えるべきもの、報道の存在意義そのものがありました。意見は分かれると思いますが、私はその時、「例えご両親が嫌がっても、プロとして写真を撮影し、

世に訴えねばならなかった」と思ったのでした。先輩記者に「お前は どう思っているのか」と聞かれ、自分の率直な気持ちを伝えると、「分かっているならいい」と一言、言われただけで、怒られはしませんでした。社会の雰囲気も大切ですが、それに流されずに、もっと大きな視点からの意味を考え、自分の良心に照らして、恥ずかしくない判断をしなければならなかったのです。そしてその責任は自分が持つ、そんな覚悟がなかったのです。あの時の教訓、プロとしての覚悟の大切さは、今でも私の原点になっています。

以上、とりとめなく、駆け出し時代の思い出を書かせて頂きました。報道志望の方には等身大の新聞社の現状を知って頂き、これから就職される方には、「こんな人でも社会人になれるんだ」という気楽な気持ちを持って頂けたらと思います。一つ言えることは、仕事は、学生時代とはまた違った面白さがある、ということ。それは真剣勝負の面白さです。世の中に直接、インパクトを与えられる充実感の良いものです。チャレンジの心を忘れずに頑張ってください。